

# 知覚されていない〈過程〉と その言語化

—「ある／いる」「している」「した」の  
選択可能性をめぐる

佐藤琢三

## ◆要旨

**本**稿は、話者が眼前の〈状態〉に至る〈過程〉を知覚していないにもかかわらず、これを言語化する現象をとりあげる。話者がある領域に存在する人や対象を知覚した際、これを単純に〈状態〉として述べる場合（存在動詞の「ある／いる」）、〈過程〉を経たうえでの〈状態〉として述べる場合（「結果状態の「している」）、単に〈過程〉として述べる場合（過去形の「した」）がある。知覚されていない〈過程〉が言語化されるためにはさまざまな要因があるが、特に話者にとっての対象の知悉度が高く、状況全体を整合的に理解できる条件が整っている場合に〈過程〉の言語化可能性が高くなることなどを指摘する。

## ◆キーワード

過程、状態、存在、知覚

## ◆ABSTRACT

This paper investigates phenomena in which speakers encode unperceived "PROCESS" which precedes their perceived "STATE". When a speaker perceives a person or an object in a certain domain, it may be encoded in three ways; a) encoded with an existential verb ("ARU" or "IRU"), b) with a resultative state ("SHITEIRU"), or c) with a simple past form ("SHITA"). It is assumed that various factors are involved in encoding unperceived "PROCESS". This paper specifically argues that "PROCESS" is highly possible to be encoded when the speaker is familiar with the object that he is able to have a consistent grasp of the whole situation.

## ◆KEY WORDS

process, state, existence, perception

## Encoding "PROCESS" without Perception

TAKUZO SATO

# 1 はじめに

## 1.1 問題の所在

われわれは身の回りのあり方をさまざまな身体的経験を通して知覚し、それを自分なりに理解・解釈する。話者は知覚された事態をそのまま言語表現化していると考えるのが普通であると思われるが、実際には同じ事態を知覚しても、その言語化のあり方には複数の可能性がある。このようなことは、特に複数の言語の観察を通して自覚されることが多い。

しばしば、日英対照の観点から、日本語は「過程重視」、英語は「状態重視」の傾向が指摘されている。すなわち、話者が同じ事態を経験したり、知覚したりしても、日本語話者はそれを過程の表現として言語化し、英語話者は状態として言語化する傾向が認められる。

- (1) 遅くとも10時までにはここに来(てい)なさい。(＊いなさい) さもないと汽車に遅れますよ。／ Be here by ten o'clock at the latest, or you will miss the train. (吉川1979: 400)
- (2) 魚が終わってしまいました。／ We have only chicken. But very nice chicken. (三宅2002: 9)
- (3) (授業の始めに先生が) 前はどこまで行きましたか?／ Where are we now? (影山1996: 10)

(1)において、日本語では「来る」という過程の動詞を用いて表現しているが、英語はbe動詞を伴う状態の表現として言語化している。(2)は飛行機の中で乗務員が食事を配っている場面である。魚とチキンの2種類のメニューのうち、先に魚が切れてしまった。日本語において乗務員は、「魚が終わる」という発話時の状態に至る過程を言語化しているが、英語では発話時の状態のみを言語化している。

吉川(1979:402)は、英語では「目の存在なり状態なりをそのまま静として

言語表現のカメラにおさめていく」のに対し、日本語では「出来事の変化過程の時間的分布をながめる際そもそもその事態の初めに起った変化や動作を過去に遡って、ビデオテープを巻き戻しでも追っていく」と、両言語の視点のあり方の違いを指摘している。つまり、日本語においては、ある状態が知覚された場合、話者はその状態に至る過程を読み込み、それを言語化する傾向があるということ<sup>[註1]</sup>を述べている。

## 1.2 考察の範囲と目的

われわれが森羅万象をとらえて、それをどのような表現の型に振り分けて言語化するかという問題は、言語研究の深遠なテーマである。池上(1981)の言う「する」と「なる」の問題は、動的事象内部の問題として自動詞的表現と他動詞的表現の対立に関わるものであると言えよう。これに対し上述の(1)～(3)のような現象は、動的事象と静的事象の対立に関わるものである。

本稿は、日本語において知覚されていない過程の言語化可能性にどのような要因が関与しているのかという点について、その一端を明らかにしようとするものである。われわれがある領域内に何らかのヒトやモノの存在を認めた場合、それを言語化するには次の3つの方法がある。

- (4) a. 〈客ガイル〉型＝単純状態型：知覚された状態を単純な1つの静止像としてとらえる。
- b. 〈客ガ来テイル〉型＝過程解釈型①(複合型)：知覚された状態を事態の推移過程の1つの断面としてとらえる。
- c. 〈客ガ来タ〉型＝過程解釈型②(単純過程型)：知覚された状態に至る推移過程そのものを言語化する。

話者が家に戻ったとき、そこに客の存在を認めた。その際に、「客がいる」(＝(4a))と知覚した状態のみを言語化するのが1つの方法である。また、「客が来ている」(＝(4b))と結果状態の表現を用いて、知覚した状態とともにそれに至る過程も合わせて言語化することもできる。ただし、この設定では客が家に来るという過程自体は知覚されたものではなく、話者が読み込んだもので

ある。さらに、「客が来た」(= (4c))と単に過程を表す動詞の過去形を用いて表現することもある。この場合、話者は知覚した状態は言語化せず、あえて知覚していない過程のみを言語化したことになる。

(4a)のように、話者が知覚した状態をそのまま言語化することは当たり前のことと受け止めることができる。しかし、(4b)や(4c)の形式が選択された場合、そこには知覚していない過程が言語化されているわけであり、われわれの事態に対する解釈が深く関与している。このような、知覚されていない過程の言語化可能性には、どのような要因が関与しているのだろうか。

## 2 先行研究

ここでは、陳(2009)についてとりあげる。陳(2009)は、日本語教育の観点から、日本語母語話者と中国語を母語とする学習者のそれぞれにおける、存在動詞の表現や結果状態のテイル表現の選択傾向を問題にしたものである。これによれば、日本語話者が圧倒的にテイルの表現を用いる傾向があるのに対し、中国語母語の学習者の多くは存在表現を用いる場合がある、ということである。

例えば、アンケート調査によって(5)のような場面を提示し、空欄に言語形式を記入させたところ、(6)のような結果が得られたことを報告している。

(5) 放課後、家に帰ると……

あなた：「ただいま。(玄関に見たことのない靴がある)」

お母さん：「(玄関に迎えに来て)お帰り。」

あなた：「お客さん\_\_\_\_\_。」

お母さん：「うん、お父さんの友達よ。」

(6)	日本語話者	学習者
テイル形	87.6%	3.3%
タ形	0%	10.8%
ル形	0%	4.2%
いる/いた	2.9%	50.0%
いらっしゃる	1.0%	15.8%

いらっしゃった	0%	3.3%
その他	8.6%	12.5%

陳(2009)は10の場面を設定して調査を行っている。場面により、母語話者と学習者の回答の傾向は異なるが、上のように日本語話者の多くが結果状態を用いるのに対し、学習者の多くが単なる状態の表現を用いる場合があるとされる。この点について陳(2009)は、「中国語母語話者にとって、「移動」を表す動詞の「結果状態のテイル」は、「変化の結果の持続」という概念より、むしろ「存在」のほうに近い」(p.12)という、興味深い指摘をしている。

上記を本稿の観点からとらえ直すならば、日本語母語話者の方が知覚されていない過程の読み込みをより積極的に行っている、ということになる。もちろん、上記の結果は、話者の伝達・発話の意図、状態をとらえた際の状況などの諸要因によって大きく左右されるものであろう。以下、本稿では日本語内部の問題として、知覚されていない過程が言語化されることを可能にする諸要因について考察していく。

## 3 日本語における過程の言語化可能性

### 3.1 過程の言語化を促す積極的要因と消極的要因

本稿は話者が知覚していない過程を言語化することについて、換言するならば(4a-c)に示した3つの表現形式の選択可能性について、どのような要因が関与しているのか、その一端を明らかにしたい。知覚していない過程を言語化するということは、話者が当該の状態に至る過程を推論しているということであり、そこにはそれを可能にするための要因が働いているはずである。ただし、後述するように、過程が言語化されるにあたっては、推論を生じさせやすくするための積極的な要因と、存在表現(状態)をとりこくために結果として過程の言語化が促される消極的要因があるようである。以下の3.2と3.3では積極的要因について、3.4では消極的要因についてとりあげる。

## 3.2 状況の理解可能性

### 3.2.1 対象の知悉度：「している」の選択可能性

ここでは、「している」が選択可能な状況と不可能な状況の対比について考える。われわれがある領域内に何かのヒトやモノの存在を認めたとき、その状態に至る過程を読み込むためには、とらえられた状態が容易に理解可能なものでなければならない。逆に言うと、とらえられた状態がよくのみこめなとき、その状態に至る過程を整合的に推論するのが難しい。

(7) (大学のキャンパスの中を歩いていたところ、いかにも怪しげな風貌の見知らぬ男が立っているのを発見。)

あっ、変な人が {いる / \*来てる / \*来た}。

(8) (大学のキャンパスの中を歩いていたところ、タヌキを発見。)

あっ、タヌキが {いる / \*来てる / \*来た}。

上の (7) と (8) は、話者が何かを発見した状況であるが、話者にとってはその人物なり動物なりに対する知悉度が低い。つまり、当該の対象がどこの誰(何)であるかを知らない。そのような場合、過程の言語化はほぼ不可能である。他方、その存在の理由はわからずとも、(9) の「首相」や (10) の「お父さん」のような知悉度のある対象の場合、「している」に関しては自然である。

(9) (自分の通う大学のキャンパスの中を歩いていたところ、首相がSPらとともに本部棟の前に立っているのを発見。来訪の予定などは知らなかった。)

あっ、安倍首相が {いる / 来てる / ?来た}。

(10) (自分の通う大学のキャンパスの中を歩いていたところ、自分の父親が事務室の前の椅子に座っているのを発見。父親の来訪することは聞いていなかった。)

あっ、お父さん、{いる / 来てる / ?来た}。

このように、対象の知悉度は過程の前景化と関わる<sup>[註2]</sup>。このことは、次の (11) (12) にも表れている。

(11) 今日、学校に {お母さん / 都知事 / \*痴漢 / \*タヌキ} が来た。

(12) 今日、学校に {\*お母さん / \*都知事 / 痴漢 / タヌキ} が出た。

「来る」も「出る」も非状態の動詞であり、その意味でともに過程を表す動詞とみることができるが、「来る」が起点から着点に至る過程全体に関わるのに対し、「出る」は話者の知覚領域に入った瞬間しかとらえていない。知悉度の高い対象は過程の前景化と関わり、低い対象はこれと関わない。これは、知悉度の高い対象の方が当該の領域に存在するに至った経緯を解釈しやすいからである。対象がどこのどのような存在であるかわかるということは、その対象が当該の領域に至ったプロセスの推論を容易にする方向に作用するのである。

### 3.2.2 状況把握の度合い：「した」の選択可能性

3.2.1 でみた対象の知悉度という要因は、「している」の選択可能性を生じさせるが、(9) (10) にみるように、それだけでは「した」を選択させるのは難しい。過去形の選択可能性の問題については先行研究の蓄積がある。井上 (2001: 107) は、「シタ」を用いるためには、デキゴトが実現された経過 (少なくともその一端) を具体的な形で把握していなければならない」という指摘をしている。

(13)a. (コンロにかけておいたお湯がいつの間にか沸騰状態にある (沸騰した瞬間は見えない))

お、沸いた。 / お、沸いてる。

b. (給湯室の前を通ったら、誰が沸かしたかはわからないが、やかんの中のお湯が沸騰状態にある)

あれ、お湯が沸いている。 / ??あれ、お湯が沸いた。 (井上2001: 106)

(13a) において、話者は「沸く」という過程を知覚したわけではないが、そのプロセスに深く関わっている。(13b) においては、話者は「沸く」というプロセスにまったく関わっていない。このような場合は「した」の使用はかなり不自然である。

簡単に言えば、話者は過程を知覚してはいなくても、過程に深く関わってい

れば、「した」を使用する可能性が出てくる。次の(14)において、話者は父の存在を知覚する前から「来る」という過程の発生可能性について認識していた。この場合は(10)と異なり、「来た」も自然である。

(14) (前の日に父親が娘の留学の件で学長に直談判したいと言っていた。)

あっ、お父さん、{いる／来てる／来た}。

また、発話が知覚の現場から切り離された場合も「した」の選択可能性が生じる。

(15) ((9)の経験を家で母親に話す。)

何でかよく知らないけど、今日、学校に安倍首相が {いた／来てた／来た} なんだよ。

(16) ((10)の経験を家で母親に話す。)

何でかよく知らないけど、今日、学校にお父さんが {いた／来てた／来た} なんだよ。

現場における発見を表現する(9)と(10)において「来た」の使用にやや不自然さが感じられるのに対し、現場から切り離された場で発話される(15)(16)では「来た」もごく自然である。(15)と(16)において、話者は一連の出来事の生じた時空間からは明確に切り離された場に身をおいており、話者にとってそれらが過去のことであることが明白である。話者は一連の出来事をその外部から鳥瞰的に把握できる立場にあると言ってもよい<sup>[注3]</sup>。

このように、話者にとって状態に至る過程も含めた出来事全体を把握できる度合いが高いとき、「した」の選択可能性が生じると言えるだろう<sup>[注4]</sup>。

### 3.3 原因の局面への関心

3.3では、ヒトがある領域に存在することについて、それがなぜかを問う場合について考える。ある対象がそこに存在する目的を問う場合、状態の表現と過程の表現のいずれもが可能であるが、原因や動機を問う場合、過程の表現の

みが自然である。原因や動機は、その領域に至る過程により直接的に関わるからである。

(17) (とても優秀な学生が自分のゼミを選んだ動機を知りたい。)

a. 君、何でウチのゼミに {来た／入った／??いる} の？

b. 君がウチのゼミに {来た／入った／\*いる} 動機は何だったの？

(18) (ゼミの時間中、終始居眠り。課題も出さない学生に対して。)

a. 君、そんなんじゃ、意味ないじゃないか。何のためにウチのゼミに {来た／入った／いる} なんだ？

b. 君がウチのゼミに {来た／入った／いる} 目的は何なの？

(19)a. 言語学を勉強しようと思って、このゼミに {来た／入った／\*いる}。

b. 言語学の研究者になるために、このゼミに {来た／入った／いる}。

(17)はある学生が所属するゼミを選択した動機を問題にするものである。この場合、状態の「いる」は不自然である。他方、(18)は目的を問題にするものである。すなわち、当該の人物がその領域に存在することによって、その後、何を成し遂げようとしているかが問われている。このような場合、過程の表現とともに存在の表現も可能である。(19a)と(19b)の対比も同様である。ちなみに、日英の間には次のような傾向の違いが指摘できる。

(20)a. 君、わざわざニュージーランドまで何で来たの？

b. Why are you here?

(20a)は筆者が実際に学生に対して発したものである。語学研修先で、「和食党だからホームステイ先になじまない」と訴える学生を論そうとしたものである。この発話は過程の「来る」が用いられている。「どうしてここにいるの？」と状態の表現を使ったとしたら、根本的な存在理由を問うかなりきつい質問になっていただろう。(20b)は同席していた母語話者のコーディネーターの発話である。英語では、この状況で存在表現を用いるのがむしろ自然であろう。

また、モノの存在を問題にする場合も、原因の局面に関心がある場合、過程



を表す「した」が選択される。

- (21)a. ポテトチップスの袋の中に異物が {入った／\*入ってる} 原因。  
b. 1万円の福袋の中に10万円超の商品が {?入った／入ってる} 理由。

### 3.4 空間属性の叙述（消極的要因）

次に、空間属性の叙述という観点から過程の言語化について考える。これまでの議論は、話者が知覚していない過程をあえて読み込んで言語化するための積極的要因について論じたものであるのに対し、ここでの議論は消極的な要因に基づいて過程が言語化されると考えられるものについてである。

次の(22)～(24)はいずれもある空間内におけるヒトの存在を問題にしているが、(22)の教室の場合は状態で言語化され、(23)のトイレや(24)の着ぐるみでは「している」という形で言語化される。

- (22) (グループ学習をしたいので、空いていそうな教室のドアをノックした。)  
誰か {\*入りました／\*入ってます／います} か。  
(23) (用を足したいので、トイレのドアをノックした。)  
誰か {\*入りました／入ってます／??います} か。  
(24) (パンダの着ぐるみに向かって話しかける。)  
誰か {\*入りました／入ってます／\*います} か。

これは空間の空間らしさの度合いの問題として理解することができる。ヒトの存在する空間として典型的な教室の場合、(22)のように存在動詞「いる」が選択され、空間らしさが落ちる(23)の「トイレ」や(24)の「着ぐるみ」の場合、「入っている」が選択される。空間の空間らしさについては、例えば(25)のようなスケールを想定することができるだろう。また、このことは(26)～(28)のような言語事実に反映される。

- (25) 空間らしさの度合いのスケール  
教室・部屋等>トイレ・電話ボックス・浴室等>着ぐるみ・袋等  
(26)a. 教室に人が {入っている／いる}。  
b. 教室の中に人が {入っている／いる}。  
(27)a. トイレに人が {入っている／?いる}。  
b. トイレの中に人が {入っている／いる}。  
(28)a. 着ぐるみに人が {入っている／??いる}。  
b. 着ぐるみの中に人が {入っている／?いる}。

もっとも空間らしい「教室」の場合、(26a)のように空間らしさを付与する「の中」がなくとも「いる」が自然である。空間らしさの度合いがやや落ちる「トイレ」の場合、(27b)のように「の中」を伴ってはじめて「いる」が完全に自然となる。空間らしさの度合いが最も低い「着ぐるみ」の場合、(28b)にみるように「の中」を伴ってもなお「入っている」の方がより自然であろう<sup>[注5]</sup>。

なお、空間らしさが落ちるトイレの場合であっても、話者に本来の意味での使用意図がなく、ヒトの存在にのみ関心がある場合は「いる」が自然である。

- (29) (地震発生後、半壊した建物の現場に救助隊が到着。トイレのドアをノックした。)  
誰か {\*入りました／??入ってます／います} か。

普通、ヒトがトイレをノックするのは、その空間が使用可能な状態か否かという、当該時点における空間の属性に関心があるはずである。それに対し、(29)において、話者はヒトの有無以外には関心がない。また、空間の属性という点に関して、次の例も参照されたい。

- (30) (見知らぬレストランの前をたまたま通りかかったところ、中は多くの客で賑わっている。)  
たくさん人が {\*入った／入ってる／?いる} な。  
(31) (見知らぬレストランの前をたまたま通りかかったところ、開店祝いの来賓や関係者らしき人たちが大勢つめかけている。)

たくさん人が {\*入った/?入ってる/いる} な。

(30) の文において問題にされているのは、単にレストランという空間におけるヒトの存在の有無という物理的な問題ではなく、そのレストランが店として繁盛しているか否かという属性の問題であろう。この場合、選択される形式は「入っている」である。他方、(31) においては、単に物理的な空間としてのレストランにヒトが存在するか否かという問題である。この場合選択されるのは、存在の「いる」であろう。

それでは、なぜ、空間らしくない場合や空間の属性に関心が高い場合に、「入っている」が選択されるのだろうか。この点については、存在文のスキーマについて考えてみる必要がある。存在文のスキーマとは (32) のようなものであると思われる。すなわち、二格に示される場所名詞句はあくまで ground (地) であり、話者にとっての関心の中心ではない。話者の関心の中心である figure (図) は、あくまで格におかれる対象名詞句であろう。

#### (32) 存在文のスキーマ

〈場所〉ニ 〈対象〉ガ アル・イル  
ground figure

話者の関心が空間の属性そのものである場合、(32) の存在文のスキーマは適用しにくい。なぜならば、空間が ground であることができないからである。

以上のように、空間が空間らしくない場合や話者の関心が空間の属性にある場合、「いる」は避けられ「入っている」という形で過程が言語化される。しかしながら、この場合、知覚されていない過程が言語化されているのは、過程の存在を推論させる積極的な動機があったからというよりも、単に存在文を使用しにくいという消極的要因によって結果的に過程が言語化されたとみるべきであろう。その証拠に、(23) (24) (30) などにおいて、「入っている」が自然な一方で「いる」は不自然である。状況の理解可能性 (3.2) や原因の局面への関心 (3.3) のような積極的要因によって過程の言語化可能性があった例において、「している」や「した」とともに「いる (ある)」も自然であることとは対

照的である。

## 4 おわりに

本稿は、話者が知覚していない過程を言語化することにどのような要因が関与しているのかという点について、その一端を明らかにした。より具体的には、「いる (ある)」「している」「した」という諸形式の選択可能性について考えた。本稿がとりあげた状況の理解可能性、原因の局面への関心という要因はいずれも状態に至る過程の言語化を積極的に可能にする要因である。われわれにとって、状況をより整合的に理解しやすい場合、その状態に至った過程を読み込むことが容易になるし、状態に至った原因の局面への関心が高ければ当然、過程は言語化されやすくなる。また、過程が言語化されるのは過程を推論しやすいという積極的要因によるものばかりでもない。話者の関心が空間属性にある場合、存在表現が用いにくく、結果として過程が言語化される消極的要因による場合もある。

ただし、本稿はあくまで過程が言語化されるための諸要因の一端を垣間見たに過ぎない。過程の言語化のための要因は他にもさまざまなものがあるだろう。例えば、話者がある状態をとらえてその状態に有標性を感じた場合、過程が言語化されやすくなるかもしれない。われわれはそこに存在して当然のものについては存在表現を使うであろうが、当然でないものについてはさまざまな推論が喚起されよう。また、本稿では言及していないが、聞き手の存在を念頭においた場合、話者の伝達の意図などによっても過程の言語化可能性が異なってくることも考えられる。

本稿は、陳 (2009) と同様に、結果状態の「している」を存在動詞の「いる」「ある」と一種の類義関係にあるものとしてこれらの関係について論じたものでもある。文法の基礎的研究の観点から、「する」と「している」、「する」と「した」の対立のあり方が論じられるのは当然である。しかしながら、話者は実際の言語使用において、当該の状況を「ある」「いる」も含めてより多様な形式のうちからの選択を迫られている。その意味において、本稿における過程の言語化可能性の動機を探る研究は、このような問題に対しても意義を有するもの

である。

ところで、寺村(1984:136)は知覚されていない過程の読み込みという点について、「いわゆる動作の継続(つまり事象の始まりの結果の存在)の場合は、眼前の情景をそのまま写したものであるが、いわゆる結果の状態の場合は、眼前の状態を、ある過去の事件の結果であると解釈する思考が介在している。この型の表現が成立するためには、上のような解釈を誘発するような状況がなければならない」(傍点(本稿の筆者)という示唆的な指摘をしている。本稿の議論は、まさに寺村の言う「解釈を誘発する状況」について考えたものである。

さらに言うならば、本稿は「知覚はされていないもの実際には存在したと思われる過程」の読み込みについて考えたものである。しかしながら、われわれの言語表現の中には、「知覚もされていないし、実際にも存在しえなかった過程」を読み込んだものもある。

(33) 駅前に町の主だった建物が集まっている。(国広1985:10)

(34) 町の一角には土産物店がかたまっている。(国広1985:10)

国広(1985)はこれらを「痕跡的表現」として、実際の動き(過程)を表すものではなく、心の動きを表すものであるという見方を示した。本稿の論じた問題は、これらのような諸問題ともつながりをもつものである<sup>[注6]</sup>。

〈学習院女子大学〉

#### 付記

本稿は、言語学ワークショップ(2017年3月27日、筑波大学東京キャンパス)において、「日本語における〈過程〉と〈状態〉の言語化—英語との対照を通して」と題して口頭発表した内容の基幹部分に基づくものである。

#### 注

[注1] …… 表現類型のレベルの他に、語彙化のレベルにおいても日本語が過程重視であるのに対し、英語が状態重視であることが指摘されている。影山(1990)、三宅(2002)を参照されたい。

[注2] …… 次の例にみるように、同じ事態が繰り返し経験された場合、元々は知悉度の低かった対象に関しても、過程の言語化が可能である。

(i) (先日も見かけた不審な男を再び発見。)

あつ、あの変な人、また {いる/来てる/来た}。

(ii) (先日も見かけたタヌキを再び発見。)

あつ、あのタヌキ、また {いる/来てる/来た}。

[注3] …… ただし、現場から切り離された場で発話されていても、対象の知悉度が低い場合は過程の言語化は難しいようである。

(i) ((7)の経験を家で母親に話す。)

何でかよく知らないけど、今日、学校に変な人が {いた/?来てた/?来た} んだよ。

[注4] …… 生越(1997:150)は、「日本語は目の前の状況に関わる出来事のすべてがわからないと過去形が使えない。一方、朝鮮語は目の前の状況がある出来事の結果だということさえわかれば過去形が使える。」として次のような例をあげている。

(i) (買ったミカンを食べようとしたところ、腐っているのに気づいて)

a. 씨었네/?씨어 있네

b. ?腐った/腐ってる。

生越(1997:139)

[注5] …… 「の中」の使用可能性については、張(2001)を参照されたい。

[注6] …… 佐藤(1999,2005)は自動詞「なる」のテイル形に問題を特化させて、実際には生じていない変化について叙述する「なっている」の文として、次のようなタイプが認められることを指摘している。

(i) サッカーのゴールポストの側面は丸くなっている。

〈原因・理由の含意〉(佐藤1999:2)

(ii) 小さな森の繁みがこの屋敷の境になっている。

〈機能の叙述〉(佐藤1999:2)

(iii) すべすべに磨きをかけてある御影石の墓は、閃光に当たった面だけざらざらに焼け爛れ、光の当らなかった方は元のまま滑らかになっている。

〈構成の叙述〉(佐藤1999:2)

#### 参考文献

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店  
井上優(2001)「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について」つくば言語文化フォーラム(編)『「た」の言語学』pp.97-163. ひつじ書房  
生越直樹(1997)「朝鮮語と日本語の過去形の使い方について—結果状態形との関係を中



- 心」国立国語研究所『日本語と外国語の対照研究Ⅳ 日本語と朝鮮語』pp.139-152.  
くろしお出版
- 影山太郎 (1990)「日本語と英語の語彙の対照」玉村文郎 (編)『講座日本語と日本語教育  
7 日本語の語彙・意味 (下)』pp.1-26. 明治書院
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 国広哲弥 (1985)「認知と言語表現」『言語研究』88, pp.1-19. 日本言語学会
- 定延利之 (2001)「情報のアクセスポイント」『言語』30(13), pp.64-70.
- 佐藤琢三 (1999)「ナッテイルによる単純状態の叙述」『言語研究』116, pp.1-21. 日本言語学会
- 佐藤琢三 (2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 鈴木重幸 (1979)「現代日本語の動詞のテンス—終止的な述語につかわれた完成相の叙述  
法断定のばあい」言語学研究会 (編)『言語の研究』pp.5-59. むぎ書房
- 張麟声 (2001)「「(の)中」の基本的意味とその分布について」『日本語教育』108, pp.51-  
59. 日本語教育学会
- 陳昭心 (2009)「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果状態のテイル」—日本語母  
語話者と中国語を母語とする学習者の使用傾向を見て」『世界の日本語教育』19,  
pp.1-15. 国際交流基金
- 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987)『命題の文法』くろしお出版
- 三宅知宏 (2002)「「過程」か「結果」か—日英対照研究の一視点」『比較文化研究』4,  
pp.1-14. 鶴見大学比較文化研究所
- 吉川千鶴子 (1979)「状態表現の日英比較」林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会 (編)『英  
語と日本語と』pp.381-403. くろしお出版